

長州と薩摩

——慶応三年後半の政局——

青山 忠 正

はじめに

慶応三年（一八六七）五月の四侯会議解体から、十二月の、いわゆる「王政復古」政変に至る政治過程については、これまで、薩長両藩による武力討幕のための挙兵計画が進展する過程と、漠然と考えられていた面が強い。少なくとも、その過程自体が綿密に検討されることは、ほとんどなかった。

それは、主として次のような理由によるだろう。すなわち、遠山茂樹『明治維新』（岩波書店、一九五一年）以来、明治維新政治史研究の主流となっていたのは、変革推進主体の成立過程を追う、という視角である。その視角においては、とくに長州藩「討幕派」の成立を、藩内政治構造の分析から導き出すこ

とが、主な関心の対象となっていた。そのことの当否は、ここでは措くが、その結果として、政治過程自体の検討は、ほとんど顧みられないか、あるいは、検討されたとしても「討幕派」成立論に強く制約されたものでしかない、という研究状況が生まれたのである。

しかし、現実の政治過程とは、それ自体が独自の要因を踏まえて進展するものであり、政治勢力の性格を基底還元論的に、そこに当てはめて解釈することはできない。実際に、この時期の政局は、もろもろの政治勢力の動きが複雑にからまり合いながら、曲折を経て進展するのであり、それは、それ自体として検討すべき価値のある課題なのである。

そうした観点に立って見た場合、最近発表された佐々木克「大政奉還と討幕密勅」（京大人文研『人文学報』八〇、一九

九七年三月）は、この時期の政治史を考える上で、極めて豊富な内容を持つ論稿である。佐々木論文は、慶応三年六〜十二月の政局の動向を、薩摩（とくに大久保利通）を中心として明らかにしたものであり、その論点は多岐にわたるが、本稿の考察との関わりで最小限、必要な部分を要約しておけば、次のとおりである。

(1) 慶応三年六〜八月、薩摩（とくに在京首脳部）の方針は、王政復古と將軍職廃止を目標としたものであり、その実現の手段として朝廷クーデターが構想されていた。幕府側と武力衝突に至るかどうかは、その後の展開次第であり、ただちに討幕挙兵を構想していたとは言えない。

(2) 六月下旬、薩摩は、大政奉還建白方針を採る土佐と盟約を結ぶ。薩土盟約は、將軍職廃止条項を含んでいる限り、薩土（長）共通の目標に立つものである。ところが、八月二十日土佐藩政府は、京都へは兵力を派遣せずとの決定を下し、同時に大政奉還建白から、將軍職廃止条項が欠落することになった。これにともない、薩摩は九月初め、土佐との提携を絶つ（「返約」）とともに、土佐を頼らぬ武力クーデターを決意し、長州および芸州の同意を取り付けた。

(3) このクーデターは、十月初め頃に予定されたが、芸州内部に動揺が生じたため延期された。十月八日、薩長芸三藩は京都で

会談し、クーデター計画を再確認するとともに、クーデターに続く武力討幕を具体的な行動目標として掲げるに至った。(4) また、薩摩の出兵の遅れから、長州も十月三日「失機改図」を決した。京都に、この連絡が入るのは、十月九日である。このことを踏まえ、十一日薩摩は、武力討幕を正面から掲げて、藩主茂久の挙兵出馬を決定した。討幕密勅は、それを実現させる手段として要請されたものである。

この佐々木論文の持つ最もオリジナルな点を、研究史との関わりで確認しておけば、次のように言える。まず第一に、薩摩の討幕路線と土佐の大政奉還路線との相互関係を、將軍職廃止を構想のうちに含むかどうかを、両者を分かつポイントとして設定しつつ、明確に論証した点、第二に、薩摩が十月十一日に挙兵方針を決定するに至るまでの経過を跡付けながら、討幕密勅が、鹿児島からの大挙出兵を実現させる手段として必要になったものであることを明らかにした点である。佐々木は、こうした点を通じて、「討幕」の実質的な内容が、諸侯統率権を持つ將軍職の廃止であったこと、さらには「大条理」としての「王政復古」が、この歴史段階において最大の政治課題であったことを論じたのである。

以上の佐々木説に対して、私は基本的に賛成である。ただし、佐々木論文では、分析の焦点が薩摩にあてられているた

め、薩摩とコンビを組んで挙兵方針を採った長州の路線については、まだ検討すべき余地が残るように思う。佐々木説を踏まえながら、同じ時期の長州の動きを、薩摩との関わりを念頭に置いて解釈し直せば、どうなるか。本稿の意図するところは、ここにある。

なお、本稿では史料として、山口県文書館蔵毛利家文庫『年度別書翰集』⁽¹⁾所収の書簡を多く用いる。これまで研究に利用されたことがない史料なので、できるだけ全文を引用するように努めた。いささか繁雑だが、了承を願っておきたい。

一、薩長間の連絡

慶応二年（一八六六）正月に政策提携が成立して以来、薩長両藩は、基本的に共同歩調を取るようになったが、それには当然ながら、両者間の連絡態勢を充実させる必要があった。そのため慶応二年初め以来、長州藩士品川弥二郎が、連絡要員として京都二本松の薩摩藩邸に潜伏するようになっていた。

二本松薩藩邸は、御所のすぐ北側にあり、諸藩邸や諸藩士の下宿など多いところである。品川の潜伏は、むしろ幕令違反で不法滞在に当たるが、恐らくは公然の秘密であり、幕府・諸藩側にしても、その情報をつかんでいたと思われる。のちに薩

摩が挙兵に向けて兵力を入京させた場合なども、それに関わる動きは、周囲には、ほとんど筒抜けだったと考えた方がよいだろう。幕末における諸藩の政治活動が、とくに京都や大坂では、そうした情況のもとで行われていたことを、私たちは念頭に置いておく必要がある。

慶応二年六〇八月の幕長戦争のち、十二月に入って徳川慶喜が將軍職に就き、まもなく孝明天皇が亡くなると、政治情況は一挙に流動化の状態を強める。それを受けて、薩長間の動きも慌ただしさを増した。慶応三年正月には、滞在を続けていた品川に加え、井上馨が上京、ついで四月十三日には伊藤博文が京都に着いた。⁽²⁾すなわち、この四月半ばの時点では長州本藩士（ほかに吉川家士も滞在）として、品川・井上・伊藤の三人が在京して、薩摩側との折衝や長州への連絡にあたっていたのである。なお、この間の四月二十四日、薩摩の伊集院金次郎・中村半次郎が上京の途中、下関に立ち寄り、しばらく滞在することになった。

こうした動きは、直接には、薩摩が計画していた四侯会議に関わるものである。⁽³⁾その情勢を報告するため、四月末ころに井上が、ついで同二十九日には伊藤が京都を出立した。伊藤が山口に着いたのは、五月十五日ころである。この伊藤帰藩にからんで、広沢真臣が柏村数馬にあてて書いた書簡には、次のよう

にみえる。ちなみに広沢は、すでにこの時点で、長州藩内では木戸を凌ぐ最高指導者だったようだ。

【史料1】五月二十三日付、柏村数馬あて広沢真臣書簡（どちらも長州藩内に滞在。『年度別書翰集』第32冊。以下、『年度別』32、のように略記。なお、カッコ内は青山による注。）

（前略）林宇一（伊藤）帰国（中略）頃日に到り、薩土其外御尽力筋如何哉、吉報相待のみ、既に君上御勅諭被仰聞候通り不尋常時体にて唯々^{御権力}御回復万々祈々此事に奉存候、爾後於御国（長州）御不覚悟有之候ては、昨夏来御勝利も水泡に属し、不相済次第、乍恐御国家（日本）御一大事之御場合にも可有御座か（後略）

ここから京都情勢に関わってとりあえず分かることは、長州が四侯会議に真剣に期待しているということだ。薩摩に義理立てしているだけでは、決して無いのである。また、引用部分の後半、「於御国（長州）御不覚悟有之候ては：御国家（日本）御一大事之御場合にも可有御座か」という箇所からは、政治行動にかける長州の自負をうかがえるだろう。こうした感覚は、薩摩にも共通するものである。

伊藤が帰藩する直前の五月十日には、山県有朋・鳥尾小弥太

が、伊藤・井上と入れ替わる形で入京していた。下関に滞在していた伊集院金次郎・中村半次郎が、これに同行している。しかし、長州が薩摩とともに期待をかけた四侯会議は、五月二十四日、將軍慶喜が兵庫開港・長州処分⁴の勅許を獲得したことで、失敗が明らかになった。この知らせを受けた長州側の認識は、次の広沢書簡に、よく示されているよう。

【史料2】六月十九日付、前原一誠あて広沢真臣書簡（東京大学史料編纂所蔵「大日本維新史料稿本」二八八七冊）⁴

（前略）如尊論大分模様も附掛候由に候得共、何辺新將軍（慶喜）姦知を以て殿下（摂政二条斉敬）を取入、乍恐朝権も悉皆彼が手中に有之勢にて、薩土越宇四侯御尽力筋にも参兼候由、実⁴に新將軍は才略と申し、抜而たる人物、殊更宇内之形勢をも熟知、將軍の右に出候諸侯方も稀之事故、兎角庄倒、閣老も何も評判無之、ただ親政に有之様被相窺、第一朝憲御回復併に御国（長州）御回運之機会は當時に可有之、何卒薩土越宇不相撓御補翼万々祈り此事に御座候（中略）幕之真底は何処迄も（長州を）討滅に有之（中略）長幕是非曲直、天下へ分明相成候上はとても仮令一旦和解たり共、真之氷解には不立到、宿怨再発は必然（後略）

広沢は、四侯会議失敗後の京都情勢を、「朝権も悉皆彼（慶喜）が手中に有之勢」と、とらえた。さらに、「幕之真底は何処迄も（長州を）討滅」しようというものであり、たとえ「一旦和解たり共、真之氷解」に至ることは不可能だ、と述べる。長州にとって、その後の政治体制を、どのように展望するかは別として、幕府側との武力対決は、もはや避けがたい情勢と見なされている、と言えよう。

しかし、長州が、そのような方針を確定したとしても、行動に移すには大きな制約があった。長州は、元治元年（一八六四）七月の禁門の変以来、「勅勘」中で「朝敵」扱いであり、藩主父子の官位は剝奪され、藩士らが藩境外に出ることも禁止されている。現実の政治活動の場において、こういう〈秩序〉は生きているのであり、したがって、長州単独で活動することは絶対にできなかった。薩摩に、パートナーとしての役割を期待しなければならぬ所以である。

その意味で、四侯会議失敗後の六月中旬、薩摩が兵力動員を決意したことは、長州にとって歓迎すべき事態だった。もっとも、佐々木論文が明らかにしたように、たしかに薩摩の方針は、この時点では「クーデター」を意図したものである。しかし長州側が、それを正確に理解したか―薩摩が、そのことを正確に伝達したか―は、いささか疑わしい。この点をめぐる経過

を、簡単に確認しておけば、次のとおりである。

六月十六日、島津久光は、滞京中の品川・山県を引見し、近日中に西郷隆盛を山口に下向させる予定であることを伝え、それを長州藩主に報告するため、二人に帰国するよう命じた⁽⁵⁾。西郷下向の目的は、具体的には明らかでない。その目的について薩摩側は、このとき明言しなかったし、また実際には下向は中止されてしまうからである。それは、状況から類推する限り、クーデター実行のため、長州に対して支援兵力の派遣を要請するものだったのではなからうか。いずれにせよ、この時点で薩摩は長州に対して、兵力動員計画の全容を明かしてはいなかったのだ。

いっぽう長州藩政府は、六月二十二日、山口に帰り着いた品川と山県の報告に基づき、西郷の来訪を待ち受ける姿勢を取った。一般論だが、人間は自分の理解の枠組みに合わせて、他者の言を切り取る傾向を持つものである。その意味で、このとき長州が、薩摩の方針を全面的な挙兵であると受け止めていた可能性は、かなり高いと言わねばなるまい。⁽⁶⁾

二、薩土盟約と長州の対応

しかし、七月に入っても、西郷は山口に来なかった。それに

かわり七月十五日、西郷の使者として、薩摩の村田新八が山口に着いた。村田は、七月七日付で品川・山県にあてた西郷書簡―薩摩・土佐間の「盟約書」が添えられている―を携えていた。よく知られた史料だが、重要なので書簡の全文を掲げておく。

【史料3】七月七日付、品川・山県あて西郷隆盛書簡⁽⁷⁾

御一別以来、不能御音信候処、強暑の砌、無御障可被成御座、珍重奉存候、陳者、御堅約申上候後、土州後藤象二郎、長崎表より参来、容堂侯御帰国甚残念がり、大に奮発致し、大論を立、茲元御合手は雅俗共に同論に帰してしまひ、其上死を以て可尽と盟を立候て、弊邸へも談判有之候儀にて、実に渡りに船を得候心地致し、直様同意致候事に御座候、夫故色々日間取に相成、遅引に及び候儀、甚以不相済、嚙御案勞の筈と、是のみ苦心仕候事に御座候、延引の次第、何卒御海恕可被成下候、右に付ては、後藤より盟約書相認、是を以て議論一決致候手段に御座候故、右の書面差上候に付、得と御覽可被下候、後藤にも当月三日（京都を）出足、帰国致し候に付、国論決着の成行は一左右有之賦に御座候間、相分次第又々可申上候得共、（品川・山県が）御出立後、相変候手続の次第申上度に付、右様御含可被下候、別紙後藤よりの書面、御異論の処も被為在候は

ば、何卒村田（新八）へ被仰聞可被下候、尚御国論の処も不苦分は、御洩被下度奉希候、余は細大村田より御聞取被下度、文略仕候、是非小生可罷出筈の処、雑事紛々難相逃、不得止次第に御座候間、宜敷御汲取可被下候、此儀荒々奉得貴意候、恐惶謹言

七月七日

西郷吉之助

山県 狂介 様

品川弥二郎 様

以上のように、西郷の知らせの要点は、土佐から薩摩に「茲元御合手は雅俗共に同論に帰してしまひ、其上死を以て可尽」という提案がなされ、「後藤より盟約書相認め、是を以て議論一決」したこと、すなわち、土佐側提案に薩摩は全面的に同意した、ということである。それは、西郷の下向の約束は取り消す、という意味を言外に含むものであった。つまり長州側としては、薩摩が一旦決意したはずの積極的な兵力動員計画を、少なくとも一時延期した、という受け止め方にならざるを得ない内容なのである。

こうした意味を持つ、この時点での土佐側提案および薩摩がそれに「渡りに船」と同意した事態が、これまで一般に「薩土盟約の締結」と呼び慣わされてきたのであった。その内容は、

薩土両藩が「大条理」実現のため、まず建白を手段として共同行動を取るといふ基本方針を確認したものだ。それは、すでに佐々木論文が論証しており、論点として付け加えることはないが、ここでは史料論的な見地から、若干の補足を試みておきたい。

確認しておかねばならないのは、この書簡で西郷が、「後藤より盟約書相認、是を以て議論一決致候手段に御座候故、右の書面差上候に付、得と御覧可被下候」と書いていることである。もともと『大西郷全集』が、この西郷書簡に続けて、「薩土両藩盟約書」を収録していることもあって、私たちは、この「盟約書」書面も西郷が書き写したものの（西郷の筆跡）⁸ と思い込みがちだが、そう判断できる根拠は、実はどこにも存在しない。

今のところ確実なのは、『大西郷全集』などが、「薩土両藩盟約書」と題する文書を、七月七日付西郷書簡に直接関係ある史料として収録している、という事実だけである。むしろ、右に引用した文言によれば、土佐側から薩摩側に送られてきた書面を、西郷はそのまま長州に転送（薩摩として、当然控えは取っただろうが）したと解釈する方が正しいかもしれない。薩土盟約については、こうした点をめぐる考証の余地が、まだ多く残るのだが、その検討は別の機会に譲り、事実経過の論証に戻る。

ことにしたい。

長州側は、七月十五日村田新八が山口に着いたことにより、薩摩が土佐との間に「盟約」を結び、兵力動員を控える方針に切り替えた事実を知った。その「盟約」の内容も、西郷書簡及びそれに添えられた「盟約書」、さらに村田の口頭による補足説明によって了解した。

この薩摩・土佐側の動きを、長州側は、どう認識し、どう対応しようとしたのか。それについて語る史料2点を【史料4】・【史料5】として、次に掲げよう。まず、長州から山県が八月一日付で在京の品川にあてた書簡である。品川は世良修蔵とともに、村田の帰京に同行して、七月十八日山口を立ち、二十四日には京都に戻っていた。

【史料4】八月一日付、品川あて山県有朋書簡（『年度別』32）
鴻城（山口）一別後は、海路之御都合如何やと煩念仕候、もはや頃日には御着、打統御高配不少奉想像候、□□凡夫絶而相替儀も無之候、陳、御堀（耕助）備行（備前岡山行き）、直様侍御（じぎょ直目付）柏村（教馬）同伴にて上国行と相決候、就而は彼是御配意と推察仕候事に御座候、乍去別に一決仕候議論は無之、御内使者と申事に御座候、何も万事□□□□様、速に実行挙り可申様□□祈念仕

候、小生もよし田宿へ隠居、無隣庵居士に相成候、左候者兄より之一左右のみ相待つ覚悟に御座候、是亦御冷笑可被下候（後略）

この書簡では、まず柏村と御堀の上京予定が知らされている。二人の上京は、長州側としての確固たる方針を薩摩側に伝えるためではなく、とりあえず薩摩側から詳しい事情を聞くためであった。³²要するに長州としては、薩土盟約成立にからむ京都情勢の変化を計り兼ねている状態なのであらう。

見方を変えると、山県と品川の薩摩側動静に関する報告（六月十六日に久光との会見で伝えられた内容）は、ほとんど無意味に近くなってしまったのであり、少なくとも山県個人にとつては、自分の立場を失わせるに充分な事態だった。山県が、「小生もよし田宿へ隠居、無隣庵居士に相成候、左候者兄より之一左右のみ相待つ覚悟に御座候、是亦御冷笑可被下候」と、自嘲的な筆致を見せているのは、このためである。

ちなみに、吉田は現在の下関市内にあたり、奇兵隊（山県は軍監）本陣のあった場所である。山県は、そこにある自分の住居「無隣庵」にこもり、京都に戻った品川から、状況好転（薩摩が再び態度をはっきりさせること）の知らせを待つのみ、という立場に置かれたのだった。

山県が、こうした立場に追い込まれたのは、たんに薩摩の方針が変更され、西郷下向も中止されたから、というだけではない。長州側から見ても、その薩摩の方針変更が、マイナス方向に向かっていると判断されたためでもあるあらう。長州の、そのような見方を最もよく示すのが、八月六日付で、山口から京都の品川（橋本八郎と変名）にあてた伊藤博文の書簡である。

【史料5】八月六日付、品川あて伊藤博文書簡（『年度別』32・33¹⁰）

薩藩之諸彦へ可然御鶴声、村田（新八）・黒田（了介）清隆）両先生へ別て御伝言奉頼上候

秋冷相催候処、先以御清適御滞京、欽慕仕候、過日御帰国之處、折悪不得拝顔、遺憾此事に御座候、弟碌々空過光陰候間、御降念可被仰付候、其御地事情篤と不相知、如何変態可仕哉と、日々貴報相待候迄に御座候、弟想像仕候には最早時機已に過ぎ、大事去にてはなきやと頻りに懸念仕居申候処、現場之處、如何相成申候哉、過日後藤氏之高論書、竊に一見仕候処、右は実宇宙の公議、所謂天下之正道に可有之候処、此論被行候事なれば実に我天朝之為に万幸而已ならず、蒼生再拜天日候心地可仕候、然れ共、是は勝敗一決之上ならては、口舌上にて被行候儀、毛頭有之間敷

と愚考仕候、先達而南山之論、石川（中岡慎太郎）・田中（光頭）と相約置候得共、根本之方向不相定而は無覚束と、今以遷延、上京不仕、殘懷此事に御座候、尤も其の中好機相見候得者、何時も可罷上心得に御座候、伏願老兄開大活眼、大勢一変可仕乎否、御見留御報知被下候得は、弟万幸不過之、其中弟明日より木戸君從行、崎陽罷越可申候、草卒如此に候、誠惶々々

八月六日

春畝

橋本 盟兄

この伊藤書簡の要点は、次の三点である。

①「最早時機已に過ぎ、大事去にてはなきやと頻りに懸念」している。

ここで言う「時機」とは、長州側から見た武力発動の機会という意味であろう。それが、既に過ぎ去ってしまったのではないか、と伊藤は心配しているのである。

②「過日後藤氏之高論書、竊に一見」した。実現するようなら幸いだ、然れ共、是は勝敗一決之上ならては、口舌上にて被行候儀、毛頭有之間敷と」考えられる。

「後藤氏之高論書」とは、すなわち七月七日付、西郷書簡に添えられた「盟約書」を指す。伊藤は、その内容について、「右

は実宇宙の公議、所謂天下之正道」と、全面的に賛成しながらも、実現の手段については、「口舌」すなわち建白方式では不可能であり、最終的には武力に頼るしかない、と極めて冷徹な認識を示すのである。この伊藤の認識は、おそらく長州のそれを代表するものだったと見てよいだろう。

③「先達而南山之論、石川（中岡慎太郎）・田中（光頭）と相約置候得共、根本之方向不相定而は無覚束と、今以遷延、上京」を控えている。

この「南山」とは、大和吉野山系を指す。今のところ事実関係を具体的に確認できないが、吉野を拠点に挙兵する計画が、すでに伊藤滯京中（四月十三日～二十九日）から、土佐系浪士グループとの間で構想されていた模様である。上にあげた、①・②の論点も、こうした挙兵構想をベースに置いたものと考えれば、より明瞭に理解できるだろう。

以上のように、長州は薩土盟約にからむ京都情勢を、薩摩に對する軽い不信、ないしは期待外れに近い感覚を以て認識した。七月末、長州藩政府が直目付柏村数馬を、御堀耕助とともに京都薩摩邸に派遣することを決定したのは、薩摩の真意を確認するためである。七月二十七日、山口を出立した柏村は、八月六日、備前下津井（岡山県倉敷市）で御堀耕助と合流、同十一日入京した。柏村・御堀が、西郷を中心とする薩摩側と会談

したのは、同十四日である⁽¹¹⁾。

薩摩側（西郷）は、このとき初めて、兵力動員（クーデター）計画を、手順に沿って明らかにした。その内容についても、すでに佐々木論文が明らかにしているので、繰り返さない。しかし、このとき薩摩から、「素より勝敗利鈍は予め不可期待得共、弊国斃る時は、又跡を継ぎ候藩も可有之哉と、夫を見詰に一挙動仕候心算に御座候⁽¹²⁾」と、婉曲な表現ながらも明らかな協力要請があったことは、あらためて注目しておいてよいだろう。長州側柏村にしても、兵力動員に関わる薩摩のパートナースhipについて、はじめて確実な手応えをつかんだはずである。柏村一行が、薩摩船に送られて山口に帰り着いたのは、八月二十四日であった。

三、出兵協定と失機改図

八月十四日の薩長（西郷・柏村）会談で、西郷は薩摩側の現状を、土佐の後藤の上京を待っている状態であると説明し、柏村もそれを了解していた。ところが、高知では八月二十日、土佐藩政府が大政奉還建白を実行に移すこと、ならびに京都へは兵力を派遣しないことを決定していた。おそらくこの時点で、建白の内容から將軍職廢止条項を削除することも、決定された

と思われる。

当初の六月下旬時点での案とは、決定的に異なる建白計画を持って、後藤が大坂に着いたのは九月二日（入京は七日）だった。後藤は翌三日から西郷と会談したが、九日に西郷は最終的に盟約の破棄（「返約」）を宣言し、土佐の奉還建白そのものには反対しない、としながらも、それとは別個の武力クーデター路線を明確にした。

九月十五日、この路線を具体化する方針に沿って、大久保が山口に向け、京都を出立した。十八日、大久保は長州藩主毛利敬親・広封父子と会見し、兵力動員計画を説明して長州の協力要請、翌十九日出兵に関する協定を結び、さらに同日の夜には、芸州藩とも同様の協定を結んだ。

この薩長出兵協定によれば、九月二十五―二十六日までに薩摩船が兵隊を乗せて三田尻に到着し、薩長両軍が合同して大坂湾に乗り込む手筈になっていた。ところが、鹿児島では出兵反対論がまだ根強く、薩摩の出兵は遅れた。協定を信じて、薩摩船の到着を待っていた長州側は、またもや薩摩に対する不信感を募らせることになる。その焦燥感には、三田尻集結部隊指揮官の国貞直人が、十月一日付、藩政府あて書簡に、「薩船今以着港不仕、待に待居、一日千秋此事に御座候」（『年度別』³³）と書いていることから、見て取れよう。

薩摩側の態勢いまだ整わずと見た長州藩政府は、十月三日に至り、出兵の一旦延期を決定した。この、いわゆる失機改図に関わる長州側の情勢判断ならびに対応策は、次に掲げる二点の書簡から、うかがうことができる。

【史料6】十月四日付、柏村数馬あて宍戸備後助書簡（『年度別』33）

（前略）今に薩船も来り不申、且機事追々漏洩に付いては、彼（幕府側）も余程用心候様相聞へ、只今の体にては万々成功は無覚束、就ては徒に陷穽に陥り候を、看すみず薩^{（マサカ）}を引留不申ては、却而御信義之欠にも相成候に付、不得止此度之一挙、留り候様にと御忠告被為成度との御事（後略）

ここに見えるように長州藩政府は、「只今の体にては万々成功は無覚束」として、失機改図を決定するとともに、薩芸側にも出兵延期を「御忠告」することにした。このことを踏まえ、次の史料に見えるように、京都薩摩藩邸さらに芸州広島にも、使者が派遣される。

【史料7】十月七日付、前原一誠あて山県弥八書簡（『年度別』

33）

爾後呈書も不仕候処、愈御壮健奉敬賀候、御帰萩後、薩使（大久保）来着、上坂御人数被付登候に相決、三田尻迄出張仕候、薩州よりも蒸気船にて人数差登、二十五日迄には三田尻来着、一同罷登候約定の由に候処、只様延引に相成、上国にても其手当仕居候処へ罷越候ては弥以御大事に付、過る二日^{（マサカ）}上坂御延引之儀被仰出、芸州迄杉孫七郎・中村誠一、被差越、京師薩邸へも広沢、直様被差越候由、然処漸昨日薩船三田尻迄来着候由、薩人の情実難計、此度之儀は実に皇国の大事件、御国家存亡に相拘候儀（後略）

この書簡では、広沢が京都に向けて山口を立ったのは、十月二日以降のように読み取れるが、正確に言えば、広沢は遅くとも九月二十七日までに、芸州藩政府と出兵手順について協議するため、広島に着いていた。広沢は、動揺を見せる芸州側に出兵を確認させたあとも、広島にとどまっていたが、十月三日土佐の奉還建白が行われたとの情報を得て、芸州の植田乙次郎とともに京都に向かって広島を立っていた。その直後に、山口からの失機改図を伝える使者として、杉・中村が広島に着いたと思われる。つまり、広沢は長州側の出兵延期を知らないまま広島を立ったのである。その広沢が、京都に着いたのは十月六日

だった。

広沢着京時点での薩長在京首脳部の状況判断は、次に掲げる十月八日付、品川書簡によって分かる。この書簡の宛て名は「山佐両君」だが、山県有朋・佐世八十郎（前原一誠）を指すと思われる。

【史料8】十月八日付、「山佐両君」あて品川弥二郎書簡（『年度別』32）

曳統き御苦慮之程、奉遙察候、小子儀過る朔夕浪華着仕候
 処、京師之処彼是混雜有之、一旦は当惑仕候得共爾後登京
 之上談合、芸も愈々前議に復し、却テよくしまり候付、其
 辺決して御煩念被下間敷、畢竟芸人在京之俗吏とも少々う
 れ（ろカ）たへ候計りにて、何も幕中堅固と相固め候と申
 す訳ケには無之候間、篤と京師手都合之処、広沢君より御
 聞取可被下候、巨細申上度候得共、朝廷之処ニ付ては不可
 書之事件も有之候付、何もく（沢）氏の御頭に附し申
 候間、直に御聞取可被成下候、其内時下御自然、為邦家專
 要奉存候、草々頓首

十月八日

尚々、戦後^{（戦後）}彼是被仰聞候件ハ書付ニ致し、相談候処、
 一々尤と申事故、左様ニ御含ミ可被下候、花城之処も

前議ニ替り候間、此議も篤と広氏より御聞取奉願候、
 以上

ここで品川は、まず、芸州が一旦動揺を見せたものの、「愈々前議に復し」、かえってよく締まったので心配無用と述べている。ちなみに、「芸人在京之俗吏」は、辻将曹を指すのだろう。もっとも、朝廷内部の動きなどは「不可書之事件も有之候」ため明記せず、広沢が山口に帰ってから、口頭で報告するとしている。

現実には、この品川の通報は、この日に行われた薩長芸三藩首脳部の協議を踏まえたものであった。出席者は、薩摩から西郷・大久保・小松帶刀、長州から広沢真臣・品川弥二郎、芸州から辻将曹・寺尾生十郎・植田乙次郎、以上八名である。佐々木論文が言うように、彼らはここで「クーデター」に続く武力挙兵をも、明確に行動目標として掲げるようになったのである。

さらに、右の品川書簡が「朝廷之処ニ付ては不可書之事件も有之」と、具体的に書くことを避けた朝廷工作とは、薩摩を通じて朝廷に対し、「相当之宣旨」降下が要請されたことだった。状況から見ても、それが武力挙兵を正当化する名分としての意味を持つものだったことは、間違いないだろう。

四、密勅降下前後の状況

さて、ここで念を押しておかねばならないのは、十月八日三藩協議の段階では、薩摩の出兵が遅れ、長州も失機改図を決したことを、まだ京都ではだれも知らなかったことである。広沢にしても、そのことを知らないまま京都に来ていたのだった。

広沢は、その状態のまま、三藩協議の内容を山口に伝えるため、当日八日の夜に京都を立った。ところが、九日夜に山口からの使者、福田俠平が京都に着いて、失機改図を通報した。そのとき広沢は、すでに大坂まで下っていたが、事態の急変に応じて、すんでのところ京都に呼び戻された。翌十日から十一日にかけて、薩長芸在京首脳部の間で、あらためて協議が持たれた。その模様を伝える広沢の書簡を、次に掲げることにする。

【史料9】十月十一日付、藩政府あて広沢真臣書簡（『年度別』32）

（前略）弟事、植乙（植田乙次郎）一同過ル六日上京仕、爾後薩芸申談、何分決定（に）立至り候処、同九日福田（俠平）上京にて思召之旨伝承仕、早速両藩へ申談候処、いずれも尤ニ奉存候、詰り当節時機を先見合せ、追て得□□□

機会を相謀、可然との決議にて差当爰元之手筈を合せ置き、一先小松・西郷・大久保一同帰国、君公御父子之思召も相窺ひ、其筋を以何分可致示談との事に付、兩三日中には第一同下坂、蒸氣艦^之乗船、三田尻迄立寄り、直に鹿児島へ罷歸候筈ニ御座候、幕情当今尤困迫之事件不少、併兵備者日ニ増嚴密ニいたし、孰れ之道当月中ニハ屹度三藩手筈を合し、断策無之而ハ、決而王政御復古之御実行者相挙り申間敷奉存候、尤も兩度延期ハ還而大幸之至ニ而後謀も別而相締り可申奉存候、前件之趣ニ付、諸隊其外（三田尻まで）御繰出之諸兵、一先鴻城（山口）内へ御引取候共、更ニ不相撓様肝要ニ奉存候、委細之義ハ世良修蔵差歸シ、御直ニ御聞取可被下候、追付小松一同三田尻迄罷歸り可申候、勿論同人も余程差急可申候得共、一寸□□様御面会之御都合相調候得者可然事と奉存候、猶又、世良一同、村田新八罷下り、同藩人数引合杯御相談可申候間、宜様奉願候、為其差急キ申上縮候、恐惶謹言

端書○土芸共四五日前、彼ノ献白差出申候、幕ハ最差迫り、後藤も弥反正実跡不相拳候得者、乾（板垣退助）・小笠原（唯八）等之人数差添、必ス上京致せ候と申事

この広沢書簡は、十月十四日の、いわゆる討幕の密勅（以下、本稿では内容に即して慶喜討伐の密勅、と呼ぶ）降下前後における、薩長芸三藩の動静を知るうえで、決定的に重要な内容を持つ史料である。以下、文脈を補足しながら、要点を整理しておく。

①まず、広沢が芸州の植田乙次郎とともに十月六日京都に着き、その後（八日）に薩摩・芸州側と協議、「決定に立至」ったことが確認できる。この場合の「決定」とは、先に触れたように、挙兵のことにはかならない。

②ところが、九日に福田侯平が山口から到着、「思召之旨」すなわち失機改図を伝えた。そのため広沢は、さっそくその件を薩芸側に図ったところ、両藩「孰も尤」とこれを了解し、「当節時期を先ず見合せ」ること、すなわち計画実行の延期を決議した。

③この後、事態展開のポイントになるのは、薩摩が大挙出兵を実現させることである。そもそも長州の失機改図にしても、薩摩出兵の遅れが直接の理由であったのだが、さらに、十月八日の第一次三藩協議以後は、挙兵のための本格出兵が求められている。それを実現させるため、「小松・西郷・大久保共一同帰国、君公御父子様（久光・茂久）之思召も相窺」うこと、すなわち藩主茂久の率兵出馬を促すことが予定された。

広沢書簡では直接記されていないが、この十月十一日の第二次三藩協議において、薩摩藩政府に出兵を納得させるためには、形式的であれ「勅命」が最も有効と結論されたことは、もはや疑う余地がないだろう。それは、たしかに十月八日に要請された「相当之宣旨」と直結するものではなく、十月九日夜以降の新たな状況展開を受けて、急遽必要となったものであった。したがって、その具体化としての慶喜討伐の密勅（十月十四日）は、鹿児島からの出兵を、どうあってもこの時点で実現させる、という極めて具体的な、言い換えれば限定された目的を持つことになったのである。

④最終的に、計画実行の時期については、三藩が京都・大坂に兵力を展開した後、「孰れ之道当月中には屹度三藩手筈を合し、断策無之而へ、決而王政御復古之御実行者相挙り申間敷」と、遅くとも十月中与予定された。

広沢書簡の要点は、以上の通りである。この予定に従って、密勅を携えた小松・西郷・大久保は、広沢・品川とともに、十月十九日、大坂から芸州艦に搭乗、三田尻を経て（二十一日夜着）、鹿児島に向かった。

このとき広沢らも、長州藩主父子にあてた密勅を与えられていたが、長州にとってそれはあまり大きな意味を持たない。長州の行動を大きく制約していたのは、「朝敵」とされていたこ

となのだから、まず必要なのは、それを解除する藩主父子の官位復旧措置である。たしかにこのとき、官位復旧の沙汰書も同時に出されてはいた。しかし、それは公表されてこそ、はじめて意味を持つものだ。つまり、沙汰書であれ、慶喜討伐の勅命であれ、長州の立場からすれば、「密勅」では実際の役にはとんと立たないのである⁽¹⁴⁾。

五、「王政復古」政変前夜

大久保らが鹿児島に帰り、密勅を提示したことにより、藩主茂久は藩兵を率いて、十一月十三日鹿児島を出港し、三田尻を経由して二十日には大坂に着いた。また、長州は折から、長州処分伝達のため家老が上坂せよ、との幕命があったことに名をかりて、毛利内匠が千名以上の兵力とともに三田尻を出港、十一月二十九日には摂津打出浜（兵庫県西宮市）に上陸することになる。

この間に京都では、十月十四日、將軍慶喜が土佐の建白を受け入れ、政権奉還の上表を朝廷に提出、翌十五日朝廷は、これを聴許し、諸侯への命令等は、今後朝廷の議奏・武家伝奏が取り扱うと声明した。こうした幕府側の動きは、薩長にとっても予想外に違いなかったが、現実の政治的效果としては相反する

二つの側面を持った。

一つには、政権奉還という事態により、幕府の諸侯統率権が制度上あいまいになったことである。このことはおのずから、諸侯がどのような行動を取ろうと、幕府の意向に制約される必要がなくなった、という意味を持った。これは、薩長など反幕府側にとって有利な側面であらう。

しかし、それは逆の面から言えば、幕府に対して武力を行使する名分が不鮮明になった、ということでもある。薩長側が武力を用いても実現しようとしているのは、外見上の制度変更ではなく、徳川將軍家が実態として持つ政治的力量を、大幅に削減しようということだ。それが「王政復古」と連動する限り、朝廷内部と連携を保った慎重な政治工作が、さらに必要となったのである。この経緯を示すのが、次の十一月二十七日付、山口の藩政府首脳にあて、京都から品川が発した書簡である。品川は、島津茂久が率兵上京の途中、三田尻に寄った際、薩摩船に便乗して京都に戻っていた。

【史料10】十一月二十七日付、木戸・広沢・御堀あて品川弥二郎書簡（『年度別』33）

尚々本文之處、藩^{（薩摩）}之論替り候と申訳ケハ毛頭無之、
唯々朝廷之處、先之手都合通り奪玉等之事、出来ぬ

故、致し方無之、此策ニ相成申候、公卿之条理ヲ申サルルニハ、イカナル^①モ致し方無之ト申候

寸楮呈上仕候、寒冷之節、先以御壯健御尽力可被為遊ト奉敬賀候、扱ハ私共過ル二十三日孰レモ無異入京、相国寺中へ潜居仕候間、乍憚御放念可被下候、扱当地之形勢、尔後相替リ儀モ無之候得共、朝廷之處、火急ニ一発ト申訳ニ参ラス、大(久保)氏其外色々尽力ナレトモ明晩頃一発ニハ兎角参ラス、其訳ケハ將軍大政ヲ朝廷へ帰シ候ニ付イテハ一ト通り条理ヲ立、其上聞サル時ハ、コノ前ノ秘書通リトノ御事ノヨシ、就テハ先不日惣参内、大政官ヲ立、即日將軍ヲ諸侯ノ列ニ下シ、会桑ヲ奪職、帰国ヲ命シ、我藩ノ兵ヲ入ルル等ノ勅ヲ下シ、其他云々ノ事件ヲ運ヒ候トノ事也、実ニ戦期ヲ失シ、彼ヨリ暴撃ニ逢候モ難計、懸念此事奉存候、来月五日マテノ処ハ先西ノ宮へ滞陣致シクレ候トノ事ニテ黒嘉(黒田嘉右衛門清綱)今晚ヨリ下坂仕候、幕親藩モ議論紛々之處、過日尾老侯上京ニテ辞職伏罪之處ニ決シ居候得共、会・紀・大垣辺ノ処、中々折合不申ヨシ、歩兵ハ悉ク三島^{薩長也}ヨリ江戸へ引取候ヨシ、慶喜ノ直書ヲ持、梅沢孫太郎参リ候ヨシ、蒸気船ヨリ参リ候歩兵ハ四大隊入京ト申事、外ニ格別兵ヲ増シ候様ニハ相見エ不申候、世間書付類ハ作間(新四郎)・光永(神太郎)ノ両士御持

歸リニ付、御覽可被下候、幾回ニモ時機ヲ失ヒ候事、実ニ遺憾ニ堪へ不申候得共、今更致シ方無之、唯々彼ヨリ先ヲツケラレヌ様ニト、夫ノミ煩念仕候、

朝廷ノ御手都合、巨細申上度候得トモ何分差急ギ且極密ノ事ノミ多ク御座候間、書加へ不申候、阪本良馬・石川清之助ノ兩人、過ル十六^(ツ)日ノ夜、河原町邸前ノ下宿ニオイテ、壬生浪士ヨリ暴殺セラレ、実ニ相惜事ニ御座候、乍併コレニテ土人一シホ奮発致シ候ヨシ、伊藤甲子太郎其外四人モ過日壬生浪総督近藤勇ノ手ヨリ横殺セラレ申候、伊藤ハ是マデ色々疑惑モ致シ居候得トモ、此度ノ拳ニテ見レハ、弥議論正シキ事ト被察候、余ハ両士ヨリ御聞取可被下候、其内時候御愛護、為御国家奉祈上度候、頓首

霜月二十七日暮

橋 八 拜

木戸 様

広沢 様

御堀 様

差急ギ、イツモ乱毫、御叱リ無之様、伏シテ奉願上候、不屈不撓之二字、幾回ニモ奉祈願上候

以上は、品川書簡の全文だが、例によって文脈を補足しつ

つ、あらためて要点を追って行こう。

①最大のポイントは、言うまでもなく次の箇所である。

「朝廷之処、火急ニ一発ト申訳ニ参ラス、大（久保）氏其外色々尽力ナレトモ明晩頃一発ニハ兎角参ラス、其訳ケハ將軍、大政ヲ朝廷ヘ帰シ候ニ付イテハ一ト通り条理ヲ立、其上聞サル時ハ、コノ前ノ秘書通リトノ御事ノヨシ、就テハ先不日惣参内、大政官ヲ立、即日將軍ヲ諸侯ノ列ニ下シ、会桑ヲ奪職、帰国ヲ命シ、我藩ノ兵ヲ入ルル等ノ勅ヲ下シ、其他云々ノ事件ヲ運ヒ候トノ事也」

ここに見えるように、現実の十二月九日政変の計画は、この日に最終的に具体化したものである。大政奉還は、薩長側の挙兵手順を狂わせるものであり、そのために、「火急ニ一発ト申訳ニ参ラス（中略）一ト通り条理ヲ立」てる段取りが必要になったのだ。現実の経過に照らして考えるなら、その段取りは、小御所会議で、慶喜に辞官・納地を命じようとしたことだろう。そのうえで、慶喜がそれに応じないとき、「コノ前ノ秘書通リ」、すなわち十月十四日慶喜討伐の密勅に沿って、武力挙兵が実行に移されるのである。

②そうとらえた場合、重要なのは、「先不日惣参内、大政官ヲ立、即日將軍ヲ諸侯ノ列ニ下」すなど、政変の際に行われた具体的措置は、必ずしもそれ以前からの予定ではなかったこと

だ。それは、いま見たように、大政奉還後の状況変化に応じて、この時点で最終的に具体化されたものである。

そのことは、冒頭の尚々書きで品川が、「本文之処、藩之論替り候と申訳ケハ毛頭無之、唯々朝廷之処、先之手都合通り奪玉等之事、出来ぬ故、致し方無之、此策ニ相成申候」と念を押していることから確認できよう。ひるがえって考えれば、それ以前の挙兵計画は、かなり強引かつ単純な「奪玉」を、とりあえずの目的としていた可能性が強いように思う。ともあれ、現実の歴史過程において実行されたのは、この十一月二十七日決定の計画だったのである。

おわりに

以上のように、本稿では、慶応三年後半の長州の動きを、薩摩との関係を軸としながら検討した。主要な論点を簡単にまとめておけば、以下のとおりである。

(1) 長州は、薩摩と異なり、すでに六月半ば時点で幕府との武力対決を決意していた。長州側は、同じころ薩摩側から西郷下向の予定が示されたことにともない、薩摩の方針をも全面的な挙兵と受け止めていた可能性が強い。

(2) 六月下旬、薩摩が土佐と盟約を結び、西郷下向が中止された

ことについて、長州はやや不信の念を抱いた。長州側は、盟約内容については賛成したが、建白という方式には期待を持たなかった。

(3) 九月十九日、土佐との提携を断った薩摩と、長州・芸州との間で出兵協定が結ばれた。これに基づく計画は、薩摩の出兵が遅れたため、長州によって延期されたが、その情報が入る直前、十月八日京都において薩長芸三藩首脳部協議により、明らかな武力挙兵が計画された。

(4) 長州出兵延期の報を受けて、十月十一日在京の薩摩首脳部は、藩主茂久の率兵出馬による全面的な兵力動員を予定し、それを藩政府に決断させる名分として勅命が必要とされた。ただし、密勅である以上、長州にとっては、大きな意味を持たなかった。

(5) 大政奉還は、薩長の挙兵手順を狂わせた。手順の練り直しを迫られた薩長は、十一月二十七日、大政奉還後の新たな状況展開を踏まえて、政変計画を最終的に具体化した。現実の十二月九日政変は、これが実行されたものである。

なお、薩長武力挙兵の意図そのものについては、本稿でもまだ十分に明らかにできた訳ではない。これらについては、今後の課題としておきたい。

註

(1) この史料は、明治期以降に毛利家が、明治維新期の関係者の書簡を年度別に編纂したもので、すべて写本だが、伝記類などにも紹介されていない書簡を多く含んでいる。なお、史料閲覧にあたり、山口県文書館ならびに山口県史編さん室の御世話になった。記して謝意を表する。

(2) 以下で述べる事実関係については、原則として、『年度別書翰集』に収められている各書簡によるが、日時を追った人の動きなどについては、いちいちの注記を省略した。あまりにも煩瑣になるためであり、他意は無いので、了承されたい。

(3) 四侯会議については、拙稿『慶応期の政治過程と討幕の意義』(『日本史研究』二四六、一九八六年)、参照。

(4) この書簡は『年度別書翰集』に収録されているもの良いはずだが、見当たらない。また、今のところ、ほかの刊本史料でも掲載されているのを発見できない。

(5) 山県・品川の復命書、参照。徳富猪一郎編述『公爵山県有朋伝』上巻(山県有朋公記念事業会、一九三三年)七八三〜七八四頁。

(6) とくに岩国吉川家を通じた情報ルートでは、この傾向が強いように思う。拙稿「岩国と薩摩―水面下の薩長交渉―」(『佛教大学総合研究所報』第十一号、一九九六年、参照)。

(7) 大西郷全集刊行会編『大西郷全集』第一巻(平凡社、一九二六年)八六〇〜八六四頁。

(8) 同前、八六四〜八六八頁。

(9) 柏村らの上京経過については、拙稿「長州の密使」(『佛教大学報』第四六号、一九九六年、参照)。

- (10) この書簡は、『年度別書翰集』32・33に重複して収録され、また春畝公追頌会編『伊藤博文伝』上巻(統正社、一九四〇年、二九九〜三〇〇頁)にも掲載されている。ここでは、『伊藤博文伝』掲載本を底本として、三種を校訂しながら引用した。
- (11) 註(9)に同じ。
- (12) 毛利家文庫『柏村日記』(写本)慶応三年八月十四日条。
- (13) 井上勲『王政復古』(中央公論社、一九九一年)二三二頁以下、参照。
- (14) のち、十二月八日の朝議で長州藩主父子の官位復旧・入洛許可が公に決定されるが、この沙汰書は十二月十七日に、山口にもたらされ、直ちに藩政府内に布告された。毛利家文庫『柏村日記』(写本)慶応三年十二月十七日条、参照。